

令和元年度

読書感想文コンクールを終えて

教育支援センター運営委員会

第44回校内読書感想文コンクールの審査結果を発表します。1年生からは194編、2年生からは188編と、合計382編の応募がありました。教育支援センター運営委員会の教員9名と国語科教員3名による審査・投票の結果、その中から4名の入選作を決定しました。以下にその学生の氏名と作品名を掲げ、榮譽をたたえたいと思います。

また、惜しくも入選には至りませんでした。審査の過程で優れた評価を得て、最終選考に残った作品は佳作とし、その学生の氏名も併せてここに紹介します。

最優秀賞

物質化学工学科2年 齊藤 みづほ 今まで過ごした日常は

優秀賞

電気工学科2年 寶持 和馬 人の力——君の臍臓をたべたいを読んで——
情報工学科1年 北畑 祐希 障害者から見た「本当の障害」とは何か
物質化学工学科1年 原 朱眸 心が晴れた記念日～心晴日和～

佳作

2M 清水 健輔	2M 庄野 晴人	2M 松本 尚樹	2E 神谷 柁徳
2E 南阪本咲月	2S 荒深 健伍	2S 宮田丈太郎	2I 谷奥 稔
2I 徳持 進一	2I 椋本 純	2C 貫野 楓晃	2C 床呂 祐佳
1M 池田 侃市	1M 小澤 陸人	1E 池口 聖直	1E 羽瀨 颯
1S 入江 駿	(非 公 表)	1I 川城 聖矢	1I 島岡 宏彰
1I 竹田 岳人	1C 小倉まゆき	1C 金子わかな	1C 菊山 愛花
1C 横山 温人			

さて、入選作品について、以下に講評を述べます。

最優秀賞に選ばれた2Cの齊藤さんは、昨年映画化された『日日は好日』について感想をまとめています。本作品は主人公が「お茶」を通してどのような状況でも前向きに「生きる」ことの喜びや幸福を見いだしていく作品です。齊藤さん自身が茶道を学んでいるということで、親近感を抱きながらこの作品を読んだことがうかがえます。この感想文では、本を選んだきっかけ、あらすじ、今回の読書を通して齊藤さん自身が感じたことや変化したこと、印象に残った部分が素直な言葉で表現されています。簡潔でよくまとまった感想文と言えるでしょう。齊藤さんにとって、茶道においても今後の生き方においても、得るものが多い読書体験だったように思います。

次に、優秀賞に選ばれた3名について述べていきます。2Eの寶持さんは、はじめ2015年に発表されてその後大ヒットし、2017年には実写映画化された『君の臍臓をたべたい』を題材としています。本作は「君の臍臓をたべたい」という言葉に込められた意味や、読者の予想を裏切る結末が目撃されることが多いように思われます。ところが寶持さんは主人公の「僕」の成長に着目し、他者の存在によって人が成長できることを、自身の経験と

結びつけながらまとめています。このように実体験と重ね合わせることで、その読書経験はより豊かなものとなり、読者自身の経験として蓄積されていくことでしょう。

IIの北畑さんは、視覚障害者に聞き取り調査をし、その生き方や考え方をまとめた『目が見えない人は世界をどう見ているのか』を取り上げています。読書感想文の前半では、視覚障害者ははじめから視覚がないからこそ、それ以外の感覚でバランスを取っていること、視覚情報がないからこそ世界を立体的に捉えられるという視覚障害者の豊かな感覚を紹介しています。後半では障害者の社会的な位置づけや、差別や偏見が生まれる原因を北畑さんなりに考えてまとめています。

ICの原さんは、いじめに遭っている少女がある老人と会うことで一人前の大人に成長していくという『心晴日和』の感想を書いています。作中で主人公が老人の言葉を聞いて成長していくのと同じく、原さん自身もこの老人の言葉から学ぶことが多かったようです。また、作中では主人公の両親が偶然の積み重ねの結果運命的な出会いを果たし、主人公もまた大人になってからある男性と運命的な出会いをしています。このような場面から、原さん自身も偶然と必然の関係性について考えを深めたとのことでした。北畑さんも原さんも、読書を通して新たな視点を獲得し、物事を多角的に捉える力が養われたように思います。

ところで、2019年12月23日に国立青少年教育振興機構が「子供の頃の読書活動の効果に関する調査研究」の報告書〔速報版〕を発表しました。これは、一般成人の現在と過去の読書活動と、意識・非認知能力との関連を検討したものです。報告書ではその結果が次のようにまとめられています。

- 年代に関係なく、本（紙媒体）を読まない人が増えている。（平成25年と平成30年を比較して）
- 一方で、スマートフォンやタブレットなどのスマートデバイスを使った読書は増えている。
- 読書のツールに関係なく、読書している人はしていない人よりも意識・非認知能力が高い傾向があるが、本（紙媒体）で読書している人の非認知能力は最も高い傾向がある。

三点目にある「意識・非認知能力」とは、「自己理解力、批判的思考力、主体的行動力」を指すそうですが、この中には自己肯定感や論理的思考力、物事に進んで取り組む意欲なども含まれています。紙媒体であれ電子媒体であれ、読書をしている人は読書をしていない人よりも「意識・非認知能力」が高く、特に紙媒体で読書をしている人は、この能力がより高いという結果が得られたということです。

活発な読書活動は幸福感、メンタルヘルス、共感性、読解力、寿命の向上などの効果が得られると言われていきます。その一方で、紙媒体での読書量は、年代を問わず減少の一途をたどっています。

先に紹介した報告書によれば、媒体を問わず、読書をすることで肯定的な効果が得られるようです。本校に在籍している多くの学生さんはスマホをはじめとする電子機器をよく利用しているでしょう。その利用方法の一つに電子書籍を加えてみてはいかがでしょうか。まずは短編やショートショート、ゲームや漫画の原作などから始めてもいいでしょう。気負うことなく、気軽に読書活動を生活に取り入れ、慣れてきたら、気に入ったものを改めて紙媒体で読んでみるのもいいかもしれません。そうして少しずつ読書活動の幅を広げ、来年度は今年度から一歩成長した皆さんから、今年度を上回る力作が応募されることを期待しています。

(国語科 松井)